



門遠13
2257
3

池清



繪本烈戰功記卷之三

目錄

秋原謀而誘小柴見宮内事

武田北条松山城攻之事

耳利左衛門尉與米倉彦次郎馬糞圖

謙信後而向松山之後詰事

上杉勢攻取山根城圖

信玄下墨於北條氏政事

上及法坊寺合戰之事并土肥赤石武勇之事

烈戰功記卷之三



繪本烈戦功記卷之三



第

甲斐信州朝日あまひの城主小柴見宮内平こしばのけんみやうないへい
 一が遂に自田家みづのけの属ぞく一なる。甲斐の属ぞくといふ事ことは、甲斐の
 上坂方の志が通じ、甲軍かうぐんは後と攻んと約せし由、将川中居
 合戦の刻耳うみみ槽まに守が犀川さしかがの岸に三日待り、ふは宮
 内みやうないが助ありが友をり。担露たんろ頭かぶ及びひまら。信のぶ玄げん意いが引ひき
 渡わたと。萩系はぎけい弘ひろ右みぎ清きよ門かどは、村人むらぢひとが命いのちをせし。料りょう海かいは、
 正忠せいしゆ小こ儀ぎ又また去さ清きよは、内うち意いが中ちゆう送おくりらる。萩系はぎけい命いのちをせし。密ひそに
 孫まごが後のちへ海かいはの城しろに立た踞すまる。坂さか小こ儀ぎは、對面たいめんして、其その密ひそに示しし。合
 小こ儀ぎ又また去さ清きよは、其その意いが得えて、究きう竟けいの兵へい士し三十人さんじゅうにんを引ひ率りつし。



土肥大膳赤石豊前 坂大木園

方不昇丁言三十一三



敵

肩堂かたどうと引ひ引ひ一いっ念ねん未ま也や引ひと有あるる太お田た三さん城じょうが羽
 撤げつ二に信しん玄げん出しゅつ馬まととす。大だいはは常じょうににけけたたやや松しょう山さんのの後ごにに断た快かい一いつ戰
 きて、信しん玄げん父ふ子し。氏し安あ父ふ子しとと討うちち合あわわるる關かん東とうのの敵てきのの根ね切きたたせん
 中ちゆうにに並ならびび傳でん崎さきのの先せん鋒ほうにに。其その勢せい八はち千せん餘よ騎きとと。春はる日にち山さんとと雷らい
 発はつ有あるる急きゅうにに急きゅうにに上じやう段だん橋はしにに着ちやく渡わたりあるる我われはは于こゝにに二に日にち以もつて
 松しょう山さんのの城じやう代だい上じやう校けう憲けん勝しやう事じ。務む式しき初はつにに遠とほききをを。降くだ糸いととと城じやうのの早はや敵てき
 のの海うみのの中ちゆうにに。縁えん信しん遠とほ近ちかをを。亦また太お田た三さん城じやうのの呼よび
 聲こゑをを。親おや對たいししてて曰いはすす。你なんぢ憲けん勝しやうにに後ご病びやう未ま練れんのの人ひとをを取とりりてて練れんのの
 領りやうをを。後ご法ほふもも不ふ中ちゆうにに。恥ち辱じやくをを。人ひとをを取とりりてて練れんのの
 眼まなこをを。予われ你なんぢとと討うちち果くわんんとと。太お刀たうのの柄えいはは太お田た三さん城じやうのの居い史しをを
 成なりてて怒いかららるる氣きをを。今いま乎や三さん樂らく切き捨すてららんんとと。身みの

川越力記卷之三

誰 概

誰信後而向松山之後法事
 却說武及岩松の城主太田貞隆入及三樂々我支配する松山
 城也少奈氏安攻寄る乃止すはまら。去來後法して追拂んん
 其唯伎をわんの水。氏安甲及此武田とわのよああの大軍と
 押あると後を後の人引かき。三原入は仰けんと
 亦は我後へ羽撤を飛し。頻に謙信の出るも、今上校入及謙信
 今去平九月川中宿よあて。信玄と烈戦と。天

川越力記卷之三

毛もよむらうなり。されども三木も割旁此一将をれを此を
 臆せぬ。謙信が亦近くみよる。兼信も意致せし。城中に平
 頼五郎等若狭炮術水此体まで。以山は彌龜おれはゆひは降す
 計り。君の尚着止極い本城にくだも。憲勝吾客のた其ふ
 うも信は位病發し。降糸のうていなり。うも受者やうを
 赤い。常陸とありおれら。三木が生涯の過つてい。うらうら
 人質すで取返速く心と盡し並あがら。今君と守遠んこと
 を得しを仕はら。城中にありおれら。一の兵糧するの豆玉菜乃
 書立と出し。其上憲勝がふと。身と人質よれと出
 りも。謙信をうらうら。斯近心はけられ。史まは城を
 あり。降糸も。信憲勝の大膽抜とて。云も敢ど人質あ

握 愈

コガサ
冠者

人が野暮に引寄明晃々たる利險抜手も目白人質と四断と
 此は果しく柳抜屋うらうと。大觸れて酒あんと。は。三木
 に。おれ。内。仕。落。手。予。和。睦。良。快。飲。下。三。木。よ。と。日。借
 信云。氏安が兩勢。又あうらも有。何と問ふ。三木答。然
 以。信云。父。氏。安。又。子。共。外。隊。將。分。と。見。ゆ。者。又。六。人
 教令四萬。又。余。人。と。聞。え。い。と。曰。謙。信。喚。笑。て。曰。信。云。氏。安。の
 さもあま。太郎。義。信。も。せ。よ。氏。政。も。亦。上。謙。信。が。刀。比。心。あ
 こもた。小。冠。者。も。形。り。を。信。は。依。て。彼。大。軍。に。謙。信。も。亦。上。
 以。合。戦。せ。ば。捕。て。さ。の。も。あ。故。人。數。を。疎。一。僅。半
 なる。引。率。せ。り。氏。安。が。支。配。する。山。の。根。乃。城。へ。行。程。如。何。ぞ
 有。や。同。三。木。答。一。日。又。仕。返。自。由。の。地。と。い。と。曰。謙。信。亦。云

則我力記卷之三

康 何

づれて。さしづい小城を踏破し。彼ホは猶も消を乃を
やぐて。武田小條乃支家へ使者を以て中送くまけり。今般謙信
松山に後法にして生る。彼セし。上秋憲務とつ入。膝痛りの疾
と降系ゆ。用珠後。謙信着陣し。せ。本意が失く。對
い。も。さ。ご。も。あ。ま。す。で。羅。出。く。空。腹。飯。坐。仕。し。ん。事。雨。雨。家。對
。柳。子。第。の。急。外。は。似。れ。た。先。山。の。根。乃。城。を。踏。破。し。城。兵
が。廢。盡。は。仕。亦。存。在。い。そ。と。空。氣。と。思。い。や。れ。た。あ。だ。武。田。小。條。あ
家の内。旗。と。い。カ。及。が。ん。後。坊。あ。だ。千。村。孝。解。く。強。向。い。謙。信
が。手。並。に。振。舞。申。す。侯。旨。お。し。た。あ。だ。謙。信。と。支。回。ら。ん。あ。と
兩家の大軍。轉。例。有。る。も。努。成。ま。し。と。存。在。と。云。送。り。く。取。立。目。外
の。二。天。は。既。擄。ち。あ。り。方。根。川。二。幸。本。は。後。は。舟。橋。を。い。し。せ。總。軍

後舟橋を。切て落し。例の龍丸の儀は押立。根の
折の旗平。昆字乃大旗朝風。又。翩翩。中。飄。し。武。田。小。條。は
陣。石。乃。筋。以。悠。々。と。押。通。り。山。の。根。乃。城。に。向。く。と。い。候。若
無人。者。振。舞。形。衆。
山の根之城。陥。落。之。事。
兵。者。神。速。に。貴。此。故。小。先。と。は。對。し。人。と。對。し。後。方。村。人。と
あ。や。さ。る。斯。雨。上。秋。憲。虎。入。道。謙。信。の。太。田。三。樂。と。業。内。に。は。猛。虎
の。山。と。出。が。如。く。威。風。八。方。に。震。て。小。條。家。の。旗。下。小。田。修。賀。守。と。身。を
山。乃。根。乃。城。に。押。し。寄。軍。監。藤。田。五。馬。巫。と。呼。ぶ。曰。け。謙。信。は。後
度の。差。別。あ。く。一。同。と。攻。め。せ。速。小。條。五。子。は。此。も。厚。帯。を。不。事。
あ。れ。と。嚴。令。せ。り。藤。田。畏。て。乘。廻。く。緒。率。以。知。し。與。と

敵

進

癸しと攻めたる。城中、係の幸、史周章大員あり、はるがれ、はるがれ、
 小田伊賀守、歳下、知、信、とて、鬼、神、ま、あ、し、
 つて、言、な、せ、上、大、將、氏、安、の、後、法、も、有、ら、れ、ど、も、持、口、く、
 合、め、兼、而、終、る、所、の、矢、石、を、怖、ま、ん、お、出、し、
 上、校、務、的、ま、す、り、く、お、斃、る、大、お、孫、信、頼、
 ふ、次、が、せ、そ、と、大、音、よ、呼、り、つ、採、配、振、て、
 ち、れ、が、士、卒、卒、力、を、
 斃、る、り、の、と、足、代、と、は、逆、成、本、取、り、の、け、
 出、し、て、
 攻、立、る、事、小、あ、れ、ん、息、次、の、隙、形、く、
 事、

事

仰天

兵、
 山、
 寄、
 て、
 小、
 是、
 時、
 乃、
 報、

報

亦て進来るるを。越兵發出とて。忽依と。近向とんと
 さると。兼信制して曰。是信云が進来り。柳發亂とす。事
 心ゆゆして引込下し。其云葉も。武田の二隊。又
 進来るる。見く。忽引。見く。解き。見く。上枝の老長
 士。何く曰。君何ゆ。是と知り。奇ある。武妙。又。寶
 名。の。教。は。り。内。の。鏡。より。傳。り。如。く。毫。厘。も。違。つ。ぬ。お。故
 と。各。言。と。ま。り。て。感。歎。と。兼。信。莞。尔。と。是。亦。の。事。幸。奇。ゆ。と
 ころ。ふ。あ。ら。ん。や。眼。希。山。の。根。乃。城。と。攻。り。と。見。た。う。後。来
 も。得。せ。ぬ。ほ。どの。教。の。今。う。於。て。進。ま。る。事。の。あ。ら。ん。や。見。た
 た。退。口。の。懸。つ。後。と。り。の。あり。諸。將。つ。で。辨。察。せ。ざ。ら。ん。や。と
 況。示。し。徐。く。と。押。通。り。や。ぐ。厩。橋。乃。城。よ。い。と。は。や。と。城。主。長。尾

敵

障心入道。謙忠と。呼。出。して。大。叱。り。你。承。き。今。う。山。乃。根。の。城。を
 攻。る。小。太。田。三。休。が。如。く。案。内。不。馳。来。る。久。西。氏。安。然。や。し。て。予
 飯。原。と。法。と。也。何。是。腹。痛。未。練。の。ゆ。え。一。門。と。は。は。り。て
 以。守。こ。う。緒。軍。の。見。懲。あり。と。板。打。は。兼。忠。と。斬。屠。り。雷
 勢。と。發。か。や。く。と。笑。え。れ。形。勢。極。成。物。凄。く。と。若。人。恐。怖
 せ。居。ら。あ。ら。ん。も。り。諸。厩。橋。の。城。へ。と。小。城。丹。後。守。入。道。信。令。嚴
 重。小。令。止。太。田。三。休。に。服。と。出。し。幸。四。武。臣。之。飯。原。兼。信。と
 緒。軍。以。率。し。常。威。を。示。し。小。震。し。魏。と。事。と。し。て。さ
 春日。山。と。飯。原。あり。尚。尔。小。條。氏。安。原。中。と。も。見。た。あ。ら。ん。と。信
 云。へ。云。送。り。ま。け。ら。合。戦。有。排。死。日。暮。と。や。と。兼。信。が
 傍。若。兵。人。の。振。み。あ。ら。ん。と。時。我。と。し。飯。原。と。臨。幸。す。と。あ

源平物語

十二

も亦て理不ゆわらぐ故ふ。武安への互答す。若き頼信も
大軍とて搦らふ功あり。然るに有これら軍の各聞
のれ見とてよき由も。實ハ信玄死を憂ふなり。其
共也。今度不ゆわらぐ只武安の死を憂ふ。松山
城攻め加勢する。出るなり。あてぬらば。松山
に武安の子入る。武田方へは頼信も。益
益合戦仕う。ゆきも。後令頼信廣くと
吐す。大將たる。松山を攻めぬらば。松山
かくも。松山も。又頼信。松山の代長尾
頼忠。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。

敵

下

敵

下

肝心の要害あり。松山も。松山も。松山も。松山も。
降参し。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
頼信其臆病は懲り。以後城代の武安とれ。一
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。
松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。松山も。

下



上久勢
 山根城と
 攻取
 圖

烈陣功記卷之三

十五

茂記

烈戰功記卷之三

廿五

信玄下墨於小條氏政事

松山原城及びいぬもも寄子於澤原不日其怪りれど
 甲兵よりも夫代の小荷秋来りしりち十足どうり紛失
 ちんゆれ武田乃政中のる西あく改たりれども志まご
 けまが相及勢へ終まも志れどと信玄より氏安へ使者
 送るま其のむと輕と申すれけよ氏安父子五答よけ
 某より頼もきて信玄公の成ると是す引せしは半のわ
 小荷秋紛失の事也何申りにも致し吟味仕交れども
 法務二弟に苗方二弟入千北大軍よといわ何れもわ
 改りいよ五答有る信玄自らして書く其書中上りき
 てはねども武田中とい方より改たりを終らざん望とい

申送るるよぞ氏安父子の事にも改事とて
 行宥むく人数の帳武田家よ送るまされ信玄
 馬場氏少輔景昌と改り殿の役と令せらる
 京昌畏て小條乃政西へ入り侍を十人組よ令せしめ
 改りたれけまが大道寺云番に組下よ其小荷秋と改り
 たり即時よ入出ぬけ氏安中やれれ氏安早速小
 荷秋と武田の政へ送り返され大道寺よ令して
 引出さむ武田勢の月希り終て成級よ改りしれ
 改り四月の下旬よ改りたれ一日氏政武田乃政へ
 信玄と相治ありち折書妻を并負し人等の障門と
 有るんく氏政松田尾張と召てあまを妻飯よ仕早く

見茂カ巴

新

初夏の夜合るれが長野家の武勇が志しめんと義と守勇が
 多しを骨細男と働けども名を武勇の御先
 くくわらう。遂に惣勢切崩され散る小牧を武勇
 勢の我喰せりんと勝は赤く追くる河土肥大根赤石を赤
 味方と母軍に引えんと。追来る武勇
 の別兵と突伏突崩式に強立殿しく引給と。天晴勇士
 付崩んと追迫く取圍お。ちと土肥赤石四方小高の
 突戦といは餘光よわらう。どりの甲軍現と引殿隙は其
 土肥赤石一鞭加て強枝は味方と慕ひ。一人引て終に
 何とあつらひけん。赤石を前並樹の中より。いさ中
 枝は揚物と引ひけり。まゝあゝとあて。持まては

息角子

引

ひけども枝は揚物と引ひけり。まゝあゝとあて。持まては
 五一。市土把氏某揚物と枝は引けり。如何とあても離れ
 未代すでの服障也。是我運命の盡知故朋友乃よ。み小高見
 屋々終つとと教られた。大根を。及ぞん心はけり。と作
 るより。飛下。お人しく見角引例。揚物と離れられども
 其乃良耐はけり。お人思惟して曰我は夜の越く。歩
 ろるを。味方。不審と思ひ居らんと。お人が。歩
 ちるる。味方。引。教。揚。か。鹿。ま
 ちるけ。二匹の名。教。か。出。適。引。其
 輪。中。飛。入。諸軍。あ。信。人。引。其
 為。我。教。又。食。簡。ら。越。戦。と。あ。是。河

息角子

74 敵

殿前

75



赤石豊前



土肥大膳

土肥大膳
 赤石豊前
 大木
 丸

赤石豊前

敵

見捨く退る武士の道小なり。去来やせん。先余
 義又母の兵士おのいしくも死て去る。土肥大振
 赤石冬前乃お人。隙をて赤敷のをぐれぬまが。今討死と
 名い定め。彼見南と路を横へ。茂き枝葉を小かくとり。
 追来る武田勢を愆く待てけり。かふ所は味方此土進と
 又のたし百騎ごころと成て屯し。この隙を立し。鼻角
 大隔てお人が後と執り。武田勢ハ斬とも志く。陰
 針を討つとんとをさる。敵大本横へ。其れは
 勢をくられた。是に謀けしを没つめ。容易くやらし。世
 におもひしちる。玉鳥西山は傾時己は黄昏とあつくと
 と。敵富三郎を誘は。遙く曉来輝とて。揚具とさる。陣と
 甲刃をて。敵陣の体。

敵

煙

まあおられ。土肥赤石の。長所勢も。徐く引返し
 味方と進身。箕輪とて。引返る。敵富三郎を清昌景
 勝岡を揚て。お山の陣如く。敵合戦の次身云上よ及びけまを
 信云。敵富三郎軍勢と徐き。い兵士の名を賣せ。系統中
 長沼長八郎事。敵將長所源六を誘と付取し。抜陣ありと
 感状は長刀取。賜。供相立。至る。氏安父も引分まを
 甲刃をて。敵陣の体。

稿

繪本烈戦功記卷之三

二女

